

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
<b>祛暑剂 清暑益気剂</b>		
せいしよえつきとう 清暑益気湯	清暑益気・養陰生津	西洋参 5g・石斛 15g・麦門冬 9g・黄連 3g・竹葉 6g・荷梗 15g・知母 6g・炙甘草 3g・粳米 15g・西瓜皮 30g 水煎し服用する。
温熱経緯	<p>&lt;主治&gt; 感受暑熱、津気生津 発熱、熱感、焦燥感、多汗、口渴、尿が濃く少ない、全身倦怠感、息切れ、元気がない、脈が虚数などを呈す。</p> <p>&lt;病機&gt; 暑熱により傷津し、津液と共に気も消散した状態である。 暑熱内侵により発熱、熱感、尿が濃い、脈が数などが生じ、熱邪が心神を擾乱すると焦燥感が現われる。熱邪が内で蒸騰して津液を外迫するので多汗になる。暑邪は陽邪で津液と気を最も消耗しやすく、多汗のために更に気津が耗損するので、口渴、尿量減少、全身倦怠感、息切れ、元気がない、脈が虚などを呈する。</p> <p>&lt;方意&gt; 暑熱を清解すると同時に、益気生津する必要がある。 清熱解暑の西瓜皮と、益気生津の西洋参が主薬で、清熱解暑の荷梗と養陰清熱の石斛・麦門冬が補助する。 黄連・知母・竹葉は清熱除煩に、炙甘草・粳米は益胃和中に働く。</p> <p>&lt;参考&gt; 苦寒の黄連は化燥傷陰しやすいので、暑熱が甚だしくなくて津液の消耗が明らかなきときは減量すべきである。 暑熱に湿邪を兼ねるときは、滋膩の麦門冬・知母などを減去する必要がある。 本方（清暑益気湯）と竹葉石膏湯は同じく清熱解暑、気津双補の効能をもつが、本方（清暑益気湯）は生津益気に重点があり、竹葉石膏湯は清熱和胃に重点がある。</p>	
せいしよえつきとう 清暑益気湯	健脾除湿・清暑益気	黄耆 6g・蒼朮 3g・升麻 3g・人参 1.5g・神麴 3g・陳皮 1.5g・白朮 3g・麦門冬 3g・当帰・炙甘草・青皮各 1g・黄柏・葛根・沢瀉・五味子各 3g 水煎し服用する。
脾胃論	<p>&lt;主治&gt; 素体気虚で、暑湿の邪を感受し、発熱、熱感、頭痛、口渴、自汗、四肢や身体が重だるい、胸苦しい、食欲不振、泥状～水様便、尿が濃く少ない、舌苔が膩、脈が虚などの症候を呈す。 症候の主体は、湿困脾胃であり、発熱、熱感、口渴、自汗、尿が濃いなどの暑熱傷津の症候もみられる。</p> <p>&lt;方意&gt; 益気健脾、除湿の黄耆・人参・蒼朮・白朮・炙甘草・沢瀉・陳皮・青皮・神麴、昇陽散邪の升麻・葛根、清暑化湿の黄柏、養陰生津の麦門冬・五味子・当帰の配合であり、益気健脾、除湿に重点があつて清暑生津は補助的である。</p>	
せいしよえつきとう 清暑益気湯	益気生津・清熱	黄耆 12g・人参 6g・麦門冬 12g・白朮 6g・当帰 6g・五味子 3g・陳皮 3g・黄柏 3g・炙甘草 3g 水煎し服用する。
医学六要	<p>気津両傷の全身倦怠、無力感、口渴、熱感、脈が数で無力などの症候がある。 暑熱などによる気津両傷に対し、益気健脾の黄耆・人参・白朮・陳皮・炙甘草、養陰生津の麦門冬・五味子・当帰、清熱化湿の黄柏を配合している。清熱解暑の効能はほとんどなく、気津双補が主体になっている。 日本での保険適応効能、効果 暑気あたり、暑さによる食欲不振、下痢、全身倦怠、夏やせ</p>	